

犬歯1歯、下顎小臼歯5歯、計13歯に矯正学的処置をも含め、外科的に即時移動を行い良好な結果を得た。埋伏の状態にもよるが、この方法により、多くの歯牙が保存でき、機能をいとなませることが可能である。

7. 歯科処置に偶発する顔面神経麻痺の検討

○土屋晴仁、武藤寿孝、柴 博孝
石津貞之 (千大)

今回、われわれは、患者40歳女性が、某歯科にて無麻酔でブリッジ支台歯形成した後、翌朝より左側末梢性顔面神経麻痺(ベル麻痺)が発生し当科受診後、薬物療法、マッサージ療法により完治した症例を経験した。特に誘因なく歯科治療で起る顔面神経麻痺は時に報告されているが、このような症例については誘因を検討し報告した。

8. 軽度の挫傷から発した tetanus の1例

○秋山行弘、高原正明、内山智子
岩田康一 (千大)
伊藤直樹 (千大・神内)
小林章男 (千大・検査部)

破傷風の罹患は近年比較的稀であるが、ひとたび発症すると、その致死率はきわめて高く、予後不良の疾患である。患者は、69歳の女性で、口腔内に何ら開口障害の原因と考えられるような症状がなく、右膝蓋部に軽度の挫傷を受けた約2週間後に、開口障害を主訴として当科へ来科した。入院後、歩行障害などの症状を伴ったが、典型的な破傷風の症状を発現しなかった1症例に遭遇したので、経過を報告し、若干の考察を加えた。

9. Infectious mononucleosis の1例

○高原正明、大木保秀、今井 裕
内山智子、小林 操 (千大)
寄藤和彦 (千大・皮膚)
小林章男 (千大・検査部)

われわれは感染性単核症の1例を経験したので報告する。患者は18歳女性で、顎下、頸部の腫脹を伴う菌性感染症の疑いで当科紹介された。菌性頸部リンパ節炎の診断のもとにAB-PC系抗生物質投与後4日目より、全身に及ぶ皮疹が出現、さらに39°Cを越える発熱、全身リンパ節の腫脹を認め、軽度に脾腫も触知した。又、末血像にダウニーⅡ型の異型リンパを多数認め、これらの臨床所見と検査結果より、感染性単核症と診断した。以後

ステロイドを含む対症療法により軽快をみた。近年、本疾患とアンピシリンによる皮疹が注目されているが、本症例でもアンピシリン投与後より皮疹の出現を見た。今後充分留意しなければならない問題である。

10. 下顎骨吸収性病変の2例

○藤原元幸、額賀康之、金沢正昭
堀越達郎
(東日本学園大学・歯・口外)

我々は、X線写真上、下顎骨臼歯部の、骨の吸収像をみる他、自他覚的に殆んど症状をみなかった2症例について手術を施行した。47歳女性症例では単純性骨嚢胞、26歳男性症例では乳頭状内皮細胞増殖を伴う毛細管性血管腫の診断を得たのでその概要を報告した。

11. 頸部まで拡大した広範囲菌性膿瘍の2例

○磯貝 嘉伸、武藤寿孝、今井 裕
金沢美智子 (千大)

今回我々は頸部まで拡大した広範囲菌性膿瘍の2例を経験したので報告する。症例1:患者:48歳、女性、Ⅵの自発痛と左顎下部より頤下部に及ぶ腫脹を主訴に来院。入院の上、同部に切開術を施行したが、腫脹は右胸鎖乳突筋に沿い、頸部を下行拡大した。症例2:患者、32歳、男性、Ⅶの自発痛と左右顎下部、頤下部より前頸部に至る腫脹のため来院、入院の上左右顎下隙および前頸下部の膿瘍を切開した。しかし膿は舌骨のレベルを超え、下方に貯溜する傾向があり、入院10日目に、鎖骨上窩より排膿した。2例とも頸動脈血管鞘および縦隔への波及は認められなかった。

12. 幼年期より観察した下顎骨骨髓炎の1症例

○小原正紀、今井 裕、花沢康雄
内山 聡、露崎孝二 (千大)
藤原元幸、額賀康之、金沢正昭
堀越達郎
(東日本学園大・歯・口外)

近年、抗生剤の普及により、重篤な化膿性疾患は稀になったが、一方、難治化した下顎骨骨髓炎が、時に発生する。今回は、我々は、このような現況にあつて幼年期より10年間にわたり経過した症例を経験したので報告した。本症例は、患者が成長期にあつては化学療法にて経過観察を、成人となつてからは、外科療法、抗生剤、ステロイドを併用し、今後の治療に参考となると思われる